

日本彫刻の近代

明治期から1960年代まで — 日本彫刻100年の歩み

2008年10月28日(火) - 12月21日(日)

横須賀美術館 YOKOSUKA MUSEUM OF ART

横須賀会場出品作品を章ごとに記載しています。
図録には横須賀会場に出品されない作品も掲載されています。
また、出品作品の中には図録に掲載されていないものもあります。
★印で示した図版は、同型の別作品のものです。ご了承ください。

I 「彫刻」の夜明け

No	作家名	作品名/title	制作年	素材	サイズ (高×幅×奥行)cm	所蔵	図録 掲載頁
1	宮川香山(初代)	日光東照宮眠猫水指 Mizusashi Fresh Water Jar with Lid Handle in the Shape of the Nikko Toshogu "Sleeping Cat"	1871-82 (明治4-15)	陶	31×21.8	田邊哲人氏	p.26(上)
2	旭 玉山	髑髏置物(10/28~11/24展示) Skull	1881(明治14)	象牙	高6	東京国立博物館	—
3	島村俊明	藤原鎌足像置物 Figurine of Fujiwara no Kamatari	1893(明治26)	象牙	高27	東京国立博物館	p.31
4	石川光明	西施 Xi Shi, a Legendary Beauty in Ancient China	明治時代	象牙	高41	個人蔵	—
5	石川光明	郭子儀 Guo Ziyi, a Tang Dynasty General	明治時代	木	37×23.5×15.6	個人蔵	p.38
6	石川光明	浮彫観音菩薩倚像 Wooden Relief Plate "Seated Avalokitesvara Bodhisattva with Pendant Legs"	1893(明治26)	木	141.2×86.9	東京国立博物館	p.39(上)
7	山田鬼斎	浮彫平治物語図 Wooden Relief Plate "Tale of Heiji"	1893(明治26)	木	63.9×109.8	東京国立博物館	p.39(下)
8	高村光雲	鞠に遊ぶ狎 A Pekinese (Japanese spaniel) Playing with a Ball	1902(明治35)	木	30×33×15.6	個人蔵	p.34
9	高村光雲	魚籃観音立像 Avalokitesvara Bodhisattva with a Creel	1903(明治36)	木	高37	津市教育委員会	p.35
10	高村光雲	聖徳太子坐像 Shotoku Taishi	1911(明治44)	木	高46.6	東京藝術大学	p.36

II 国家と彫刻

11	高村光雲	楠木正成銅像頭部(木型) Head of Kusunoki Masashige (wooden model for bronze statue)	1893(明治26)	木	71×40.5×40	住友史料館	p.58
12	竹内久一	伎芸天首試作 その2 Head of Gigeiten (Mahesvara, goddess of art)(study no.2)	1893(明治26)	木、彩色	高22.2	東京藝術大学	p.69 (挿図)
13	大熊氏廣	有栖川宮熾仁親王像(雛型) Statue of Prince Arisugawa Taruhito (maquette)	1903(明治36)頃	ブロンズ	高41	個人蔵(鳩ヶ谷市立郷土資料館寄託)	p.53

III アカデミズムの形成

14	ラダーク、 ヴァンチェンツォ	日本婦人 Japanese Woman	1880(明治13)	ブロンズ	高62.1	東京藝術大学	p.74
15	大熊氏廣	ガンベッタ像 Leon Gambetta	1888(明治21)	ブロンズ	39×28×30	個人蔵	p.75 ★
16	長沼守敬	老夫 Head of Old Man	1898(明治31)	ブロンズ	高55	東京藝術大学	p.79 ★
17	新海竹太郎	ゆあみ Bathing	1907(明治40)	ブロンズ	189×46×39	山形美術館	pp.76-77 ★
18	朝倉文夫	墓守 Keeper of a Cemetery	1910(明治43)	ブロンズ	180×58.5×53.5	福岡市美術館	p.78 ★
19	山崎朝雲	霽[たかおがみ] Takaogami (the goddess of rain)	1911(明治44)	木	87×46×36	東京国立近代美術館	p.81
20	米原雲海	清宵 Sugawara Michizane in His Boyhood	1907(明治40)	木	65.3×47.5×25.6	登録美術品 個人蔵	p.82
21	米原雲海	二祖[じそ] Huike Severing His Arm	1908(明治41)	木	83.4×26×25	個人蔵	(追加図版)
22	建昌大夢	お湯のつかれ Weariness of the Bath	1913(大正2)	ブロンズ	66×54×40	和歌山県立近代美術館	—
23	北村四海	空想に耽り居る女 Woman Falling in Daydream	1918(大正7)	大理石	61.5×30×31	新潟県立近代美術館 ・万代島美術館	p.87

IV 個の表現の成立

24	荻原守衛	坑夫 Miner	1907(明治40)	ブロンズ	47.5×45.5×33.5	東京国立近代美術館	p.98
25	荻原守衛	デスペア Despair	1909(明治42)	ブロンズ	52×99×58.5	礪山美術館	p.99

No	作家名	作品名/title	制作年	素材	サイズ (高×幅×奥行)cm	所蔵	図録 掲載頁
26	荻原守衛	女 Woman	1910(明治43)	ブロンズ	99×47×61	遠山記念館	pp.100 -101★
27	高村光太郎	裸婦座像 Sitting Nude	1917(大正6)	ブロンズ	27.5×13.5×14	京都国立近代美術館	p.109
28	高村光太郎	手 Hand	1918(大正7)	ブロンズ	30×28.7×15.2	呉市立美術館	p.111★
29	中原悌二郎	老人の首 Head of Old Man	1916(大正5)	ブロンズ	60×38×40	東京国立近代美術館	p.102
30	中原悌二郎	若きカフカス人 Young Caucasian	1919(大正8)	ブロンズ	42.5×20.2×18	新潟大学	p.103★
31	戸張孤雁	唱える女 Woman Chanting Prayers	1914(大正3)頃	ブロンズ	52×19×23	東京国立近代美術館	p.105
32	戸張孤雁	煌めく嫉妬 Glittering Jealousy	1924(大正13)	ブロンズ	35×20×19	東京国立近代美術館	p.106
33	藤川勇造	ブロード Blonde	1913(大正2)	ブロンズ	46.5×24.5×25	東京国立近代美術館	p.112

V 多様化の時代

34	高村光太郎	柘榴 Pomegranate	1924(大正13)	木、彩色	6×7.2×6.8	個人蔵	p.123(下)
35	高村光太郎	うそ鳥 Bullfinch	1925(大正14)	木、彩色	14×4.8×5.8	個人蔵	p.125(左)
36	高村光太郎	鯰 Catfish	1926(大正15)	木	6×42.5×12.5	東京国立近代美術館	p.124
37	高村光太郎	蓮根 Lotus Rhizome	1931(昭和6)	木	9.1×37.5×5.3	個人蔵	p.122
38	高村光太郎	白文鳥 A Couple of White Paddy-Birds	1931(昭和6)頃	木、彩色	9.1×37.5×5.3	個人蔵	p.125(右)
39	平櫛田中	酔吟行 The Chinese Poet, Li Po Reciting His Poem in Drink	1914(大正3)	木	79.5×31×36	呉市立美術館	p.126
40	佐藤朝山	冬眠 A Hibernating Frog	1928(昭和3)	木	10.5×25×22.3	個人蔵	p.128
41	佐藤朝山	山鳩 Dove	1931(昭和6)	木、彩色	25×23×15	札幌芸術の森美術館	p.129
42	石井鶴三	俊寛(頭部試作) Priest Shunkan (Study for Head)	1930(昭和5)	ブロンズ	高44(像高29.8)	東京藝術大学	p.136★
43	石井鶴三	信濃男坐像 Shinano Sitting Man	1931(昭和6)	ブロンズ	高58	小県上田教育会	p.141 (挿図)
44	橋本平八	猫A Cat A	1922(大正11)	木	高35	三重県立美術館	-
45	橋本平八	石に就て About Stone	1928(昭和3)	木	28.6×18.2×19.6	個人蔵	p.130
46	橋本平八	花園に遊ぶ天女 Celestial Nymph Playing in the Flower Garden	1930(昭和5)	木	高121.7	東京藝術大学	p.133
47	新海竹藏	結髪 Hair-dressing	1936(昭和11)	木	141×80.5×50	山形美術館	p.134

VI 新傾向の彫刻

48	仲田定之助	首 Head	1924(大正13)	白銅	40.5×20×21.5	東京国立近代美術館	p.147
49	仲田定之助	女の首 Head of Woman	1924(大正13)	白銅	43.8×21×23.5	東京国立近代美術館	p.146
50	斉藤素蔵	建築装飾八部作コンポジション(商業) Series of Eight Architectural Decoration: Commerce	1930(昭和5)	ブロンズ	61×34×32	小平市教育委員会	-
51	斉藤素蔵	建築装飾八部作コンポジション(工業) Series of Eight Architectural Decoration: Industry	1930(昭和5)	ブロンズ	60×30×30	小平市教育委員会	-
52	陽 咸二	支那人の皿廻し Chinese Plates Performer	1928(昭和3)	ブロンズ	20.5×20.5×9	個人蔵	p.162 (挿図)
53	陽 咸二	或る休職将軍の顔 Head of a Certain Retired General	1929(昭和4)	ブロンズ	43.5×20×24.5	東京国立近代美術館	p.149
54	雨田光平	母と子 Mother and Child	1930(昭和5)	ブロンズ	106.5×50×37.5	雨田光平記念館	p.154
55	日名子実三	椅子に凭れる女 Woman Leaning on a Chair	1933(昭和8)	大理石	54×65×32	個人蔵	p.153
56	荻島安二	風 Wind	1937(昭和12)	アンチモン	39×20.8×15	東京国立近代美術館	p.155

No	作家名	作品名/title	制作年	素材	サイズ (高×幅×奥行)cm	所蔵	図録 掲載頁
57	保田龍門	クリスティーヌの首 Head of Christine	1922(大正11)	ブロンズ	34×28×29	東京国立近代美術館	p.156
58	金子九平次	C嬢の像 Portrait of Miss C	1925(大正14)	ブロンズ	33×22×24	東京国立近代美術館	p.157
59	木内 克	女の顔 Head of a Woman	1930(昭和5)	ブロンズ	39×27×41	中原悌二郎記念旭川市 彫刻美術館	-

VII 昭和のリアリズム

60	高田博厚	女のトルソ(カテドラル) Cathedral	1937(昭和12)	セメント	54×32×30	鎌倉市	p.171
61	菊池一雄	青年 Young Man	1948(昭和23)	ブロンズ	171×45×31	京都市美術館	p.174
62	本郷 新	わだつみのこえ(エスキース) Voice of the Sea (Study)	1950(昭和25)	ブロンズ	78×33×22	本郷新記念札幌彫刻美術館	p.175
63	柳原義達	バルザックのモデルたりし男 The Man who Served as the Model for Rodin's Sculpture of Balzac	1957(昭和32)	ブロンズ	42.5×23×29.5	三重県立美術館	p.176
64	柳原義達	犬の唄 Song of the Dog	1961(昭和36)	ブロンズ	158.5×54.5×60	三重県立美術館	p.177
65	佐藤忠良	たつろう Tatsuro	1950(昭和25)	ブロンズ	26×17.5×20	宮城県美術館	p.178
66	佐藤忠良	群馬の人 Man from Gumma	1952(昭和27)	ブロンズ	29.5×19×24	宮城県美術館	p.179
67	舟越保武	婦人胸像 Bust of a Woman	1941(昭和16)	大理石	高53	岩手県立美術館	p.180
68	舟越保武	萩原朔太郎 Head of Hagiwara Sakutarō	1955(昭和30)	ブロンズ	高30	岩手県立美術館	p.181★

作家解説

[章]

宮川香山 (初代) MIYAGAWA, Kozan [I]
1842-1916/京都生まれ。陶工・真葛長造の四男。父から陶芸を学び、1870年ころ横浜に転居、輸出用陶磁器の生産を始める。このころ、彫刻的要素を持つ作品を集中的に制作した。1900年パリ万博をはじめ、内外の博覧会に出品。

旭玉山 ASAHI, Gyokuzan [I]
1843-1923/江戸・浅草生まれ。象牙彫刻に優れ、解剖学に基づいた、緻密で正確ながい骨の彫刻を得意とした。第1回、第2回内国勲業博覧会で受賞。牙彫の第一人者として、石川光明らと彫刻競技会(のちの東京彫工会)を設立した。

石川光明 ISHIKAWA, Komei (Mitsuaki) [I]
1852-1913/江戸・浅草生まれ。生家は宮彫大工を営む。狩野素川に絵画を、菊川正光に牙彫を学ぶ。第2回内国勲業博覧会の受賞をはじめ、内外の博覧会に出品。高村光雲とともに初期の東京美術学校教授をつとめる。牙彫のほか、木彫にも優れた彫技を示した。

島村俊明 SHIMAMURA, Shunmei [I]
1855-1896/江戸・浅草生まれ。生家は江戸彫工「島村流」の家元で、早くから才能を認められる。維新後は輸出用の牙彫を多く手がけ、第3回内国勲業博覧会では妙技二等賞を受賞。1893年のシカゴ万博にも出品した。

山田鬼斎 YAMADA, Kisai [I]
1864-1901/現在の福井県生まれ。仏師の父に学んだのち、同郷の岡倉天心を頼って上京。第3回内国勲業博覧会で受賞。高村光雲のもとで《楠木正成像》木型の制作に参加。1893年のシカゴ万博に《浮彫平治物語図》を出品。東京美術学校教授をつとめたが、夭折した。

高村光雲 TAKAMURA, Koun [I・II]
1852-1934/江戸・下谷生まれ。本名中島光蔵。仏師高村東雲に師事し、高村姓を継ぐ。写生表現を追究することで「仏臭」を脱し、伝統的な彫刻の近代化をはかった。シカゴ万博で受賞した《老猿》は重要文化財。東京美術学校教授として《西郷隆盛像》《楠木正成像》木型制作の指揮を執った。

竹内久一 TAKENOUCHI, Hisakazu (Kyuichi) [II]
1857-1916/江戸・浅草生まれ。はじめ牙彫を学ぶが、奈良の仏像に魅せられて木彫に転じ、奈良で研究に没頭する間、岡倉天心の知遇を得て、東京美術学校の開設に奔走、彫刻科教授となる。仏像研究を基礎とし、理想的な人体表現を追究した《伎芸天》をシカゴ万博に出品。

大熊氏廣 OKUMA, Ujihiro [II・III]
1856-1934/現在の埼玉県生まれ。工部美術学校の第1期生としてラグーザに学ぶ。1888年に渡欧し、パリ、ローマで彫刻制作と鑄造技術を修める。靖国神社に建立した《大村益次郎像》は、日本で初めての本格的な銅像といわれる。

ラグーザ、ヴィンチェンツォ RAGUSA, Vincenzo [III]
1841-1927/イタリア、シチリア島パレルモ近郊に生まれる。1876年に来日、工部美術学校の彫刻教師として塑造、大理石彫刻の技法を伝え、日本近代彫刻の基礎を築いた。1882年、工部美術学校の廃止に伴い、のちに妻となる清原玉とともに帰国。

長沼守敬 NAGANUMA, Moriyoshi [III]
1857-1942/現在の岩手県生まれ。イタリア公使館に勤務するかたわら、ラグーザに彫塑技法を学ぶ。1881年、公使に随行して渡伊、ヴェネツィア王室美術学校に入学。帰国後、明治美術会の創設に参加。東京美術学校彫造科の初代教授となる。

山崎朝雲 YAMAZAKI, Choun [III]
1867-1954/現在の福岡市生まれ。仏師としての修行を経て京都で活動。1896年に上京して高村光雲に師事。1907年に日本彫刻会の結成に参加。日本古代の神話などを題材とした写実的な木彫で知られ、文展、帝展の審査員を歴任した。

新海竹太郎 SHINKAI, Taketaro [III]
1868-1927/現在の山形市生まれ。近衛騎兵から彫刻を志して後藤貞行に師事した。1900年に渡欧、ベルリンの美術学校で学び、帰国後は太平洋画会に参加。朝倉文夫ら多くの後進を育てた。第1回文展に《ゆあみ》を出品。

米原雲海 YONEHARA, Unkai [III]
1869-1925/現在の島根県生まれ。大工としての修行を積んだのち、1890年に高村光雲に師事。比例コンパスを用いた「星取り法」を早くから導入。1907年、日本彫刻会の結成に参加。高い技術に裏打ちされた木彫ならではの表現を追究した。

北村四海 KITAMURA, Shikai [III]
1871-1927/現在の長野市生まれ。父は宮彫師・喜代松。上京して島村俊明に牙彫を学ぶ。のち大理石彫刻に転じ、1900年のパリ万博を視察するため渡仏。帰国後は大理石彫刻の第一人者として文展に出品。太平洋画会研究所で後進の指導にあたった。三浦市で没。

建島大夢 TATEHATA, Taimu [III]
1880-1942/和歌山県生まれ。東京美術学校彫刻科在学中、第2回文展で受賞。その後も官展で活躍し、審査員を歴任、東京美術学校教授となる。柔軟なモデリングによる温和な写実表現は、官展塑造のなかでも最もオーソドックスなものといえる。長男・寛造は抽象彫刻の先駆者。

朝倉文夫 ASAKURA, Fumio [III]
1883-1964 / 大分県生まれ。彫刻家・渡辺長男は実兄。東京美術学校在学中から頭角をあらわし、卒業の翌年、第2回文展で最高賞。第4回文展に出品した《墓守》をきっかけに自然主義的写実表現を確立した。東京美術学校教授をつとめたほか、朝倉彫塑塾を開設し多くの後進を指導した。

荻原守衛 OGIWARA, Morie [IV]
1879-1910 / 長野県生まれ。号は礫山。洋画家を志し渡米、ニューヨークで苦学を続けるうち、ロダンの彫刻に衝撃をうけて彫刻家に転向。1908年に帰国、対象の再現を超え、生命感の表出をめざす生命主義はその後の日本彫刻に強い影響を与えた。1910年に急逝。

戸張孤雁 TOBARI, Kogan [IV]
1882-1927 / 東京・日本橋生まれ。洋画を学ぶため渡米中に荻原守衛と出会い、1906年に帰国後、彫刻に転じる。太平洋画会を経て日本美術院研究所彫塑部に入り、院展同人となる。ロダン、守衛を継ぐ生命感に満ちた造形に加え、次第に象徴性に富む作風を示した。

藤川勇造 FUJIKAWA, Yuzo [IV]
1883-1935 / 香川県生まれ。東京美術学校卒業後、フランスに留学、ジャン・ポール＝ローランに素描を学ぶ。やがてロダンに見出され、数年間助手として働く。帰国後、1919年に二科会彫塑部の創立会員となった。

中原悌二郎 NAKAHARA, Teijiro [IV]
1888-1921 / 北海道生まれ。白馬会、太平洋画会研究所で画を学び、中村彝と交友する。荻原守衛に感化され、その死後彫刻に転じる。《若きカフカス人》などを発表するが、肺疾患により早世。

高村光太郎 TAKAMURA, Kotaro [IV-V]
1883-1956 / 東京・下谷生まれ。光雲の長男。東京美術学校彫刻科を卒業後、ロダンに傾倒し、西洋画科に転じて欧米に留学。その間、荻原守衛を知る。塑造のほか、木彫にも独自の境地を示した。ロダン芸術の紹介をはじめ、詩、評論など、文筆活動で果たした役割は大きい。

平櫛田中 HIRAKUSHI, Denchu [V]
1872-1979 / 岡山県生まれ。高村光雲に師事。文展開設の1907年に日本彫刻会を結成。岡倉天心に認められ、再興日本美術院に参加。彫塑部を代表する存在として、帝国芸術院会員、東京美術学校教授を歴任、戦後も木彫界の重鎮として活躍、105歳の長寿を全うした。

石井鶴三 ISHII, Tsuruzo [V]
1887-1973 / 日本画家・鼎湖の三男として東京・下谷に生まれる。柏亭は兄。小山正太郎の不同舎で絵を学ぶが、荻原守衛の作品を見て彫刻に転向。院展同人として、東洋的感覚をもった彫塑作品を発表。1944年から東京美術学校教授。新聞小説の挿絵でも活躍した。

佐藤朝山 SATO, Chozan [V]
1888-1963 / 福島県生まれ。上京して山崎朝雲に師事。再興院展に参加、同人となる。1922年、院から派遣されて渡仏、ブールデルに学ぶ。帰国後、

インド・東洋的な主題や動物の彫刻に独自の境地を開いた。師・朝雲と訣別ののち本名の清蔵を名乗り、やがて玄々と号す。

新海竹藏 SHINKAI, Takezo [V]
1897-1968 / 山形市生まれ。父は仏師。伯父の新海竹太郎に師事。官展に出品していたが、院展に移り、1927年同人となる。木彫から出発したが、塑像や乾漆像も制作した。院展彫塑部解散後、S.A.S(彫刻家集団)を結成、のち国画会に合流した。

橋本平八 HASHIMOTO, Heihachi [V]
1897-1935 / 三重県生まれ。弟は詩人の北園克衛。上京して佐藤朝山を知り、内弟子となる。第9回院展に《猫》が入選して以来、院展に木彫を発表。1927年に同人となる。抑制された動きのなかに、深い精神性をたたえた独特の作品世界をつくった。脳出血のため急逝。

仲田定之助 NAKADA, Sadanosuke [VI]
1888-1970 / 東京・日本橋生まれ。1922年ドイツに留学し、当時最先端の美術動向を美術雑誌を通じて紹介。帰国後、美術批評で活躍する一方で、同時代ドイツの影響がみられる作品を制作。三科展会員となり、1926年に「単位三科」を結成。「劇場の三科」では舞台美術を担当した。

斉藤素巖 SAITO, Sogan [VI]
1889-1974 / 東京・市ヶ谷生まれ。東京美術学校西洋画科卒業後渡英し、ロンドンのロイヤル・アカデミーで彫塑を学ぶ。1926年、日名子実三らと構造社を結成。建築と彫刻の総合を目指した活動を展開する。戦後は主に日展に出品した。

保田龍門 YASUDA, Ryumon [VI]
1891-1965 / 和歌山県生まれ。画家を志して東京美術学校に入学したが、荻原守衛らの活動をみて彫刻にも関心を持ち、卒業後、日本美術院彫刻部の研究所に入った。1921年、アメリカを経てパリに入り、ブールデル、マイヨールの教えを受ける。長男の春彦も彫刻家。

木内克 KINOUCHI, Yoshi [VI]
1892-1977 / 水戸市生まれ。朝倉彫塑塾に学ぶ。1921年渡英、翌年パリに移り、ブールデルに師事。ギリシアのアルカイック彫刻に魅せられ、テラコッタ技法を習得。帰国後は二科展、官展に出品した。戦後、朝井閑右衛門らの新樹会に参加。

雨田光平 AMADA, Kohei [VI]
1893-1985 / 福井市生まれ。別名・禎之。東京美術学校卒業後、1920年に渡米、25年に移ったパリで日名子実三と交友し、帰国後、構造社に参加。キュビズム風の作品を発表。箏曲京極流の宗家で、ハープ奏者としても活動した。

日名子実三 HINAGO, Jitsuzo [VI]
1893-1940 / 大分県生まれ。同郷の朝倉文夫に師事したが、のち離れ、斉藤素巖らと構造社を設立した。1932年に退会、いったん帝展に復帰するも、改組に反対して「第三部会」を設立。宮崎市の《八紘之基柱》など大規模記念碑の設計を手がけた。

萩島安二 OGISHIMA, Yasuji [VI]
1895-1939 / 横浜市生まれ。慶応大学予科在学

中に彫刻を志し、朝倉文夫に師事。大正期の官展に出品を重ね、のち二科展、構造社に参加して、当時の都市文化を反映したモダンな女性像を発表。日本初の洋マネキンの制作者としても知られる。

金子九平次 KANEKO, Kuheiji [VI]
1895-1968 / 東京・三田生まれ。建築家の父・吉蔵と長谷川栄作に彫刻を学ぶ。1922年に渡仏し、ブールデルに師事。サロン・ドートヌなどに出品した。帰国後、国画創作協会に招かれ、彫刻部を設立。師ブールデルを受け継ぐ量感ゆたかな人体像を得意とする。

陽 咸二 YO, Kanji [VI]
1898-1935 / 東京・京橋生まれ。小倉右一郎のもとで彫塑を学ぶ。文展、帝展で活躍し、斉藤素巖らの構造社にも参加、1929年に会員。キュビズムやアール・デコ様式を取り入れた斬新な造形表現は群を抜くが、呼吸器疾患のため夭折した。

高田博厚 TAKATA, Hiroatsu [VI]
1900-1987 / 石川県生まれ。東京外国語学校イタリア語科中退。高村光太郎との交友から彫刻を志す。1931年から57年まで滞仏し、ロラン、コクトーらと親交を結ぶ。帰国後は東京、のち鎌倉にアトリエを構え、彫刻とともに文筆活動も行った。

本郷 新 HONGO, Shin [VI]
1905-1980 / 札幌市生まれ。東京高等工芸学校卒業後、国画会に入選、1934年に会員となるが、1939年に退会、新制作派協会彫刻部の創設に参加。モニュメントへの関心が深く、戦後、社会性の強い記念像を数多く制作した。

菊池一雄 KIKUCHI, Kazuo [VI]
1908-1985 / 京都市生まれ。父は日本画家の契月。藤川勇造に師事し、東京大学美学美術史科在学中に二科展に初入選。1936年渡仏し、デスピオに師事。帰国後はモデルの内面を深く表現した作品を新制作派協会展に出品。戦後、《青年》で第1回毎日美術賞を受賞。1952年から東京藝術大学教授をつとめた。

柳原義達 YANAGIHARA, Yoshitatsu [VI]
1910-2006 / 神戸市生まれ。東京美術学校在学中から帝展、国画会展に出品、国画会同人となるも、1939年の新制作派協会彫刻部の創設に参加。戦後、フランス現代彫刻に刺激を受け、1953年に渡仏。

佐藤忠良 SATO, Churyo [VI]
1912- / 宮城県生まれ。東京美術学校彫刻科卒業後、新制作派協会彫刻部の創設に参加。1944年に応召、シベリア抑留を経験する。《群馬の人》などで評価を固め、のちには都会的で洗練された女性像を手がけた。1966年から東京造形大学教授。

舟越保武 FUNAKOSHI, Yasutake [VI]
1912-2002 / 岩手県生まれ。東京美術学校在学中から国画会に出品、卒業後、新制作派協会彫刻部の創設に参加。早くから石彫を試みる。戦後、カトリックに帰依し、キリスト教的な主題も多く手がける。東京藝術大学、のち多摩美術大学で後進の指導にあたった。